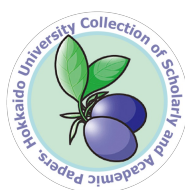




HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	横山源之助の南米移植民論
Author(s)	馬, 世汶
Citation	研究論集, 24, 1 (右) -18 (右)
Issue Date	2025-01-24
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgshhs.24.r1
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94045
Type	departmental bulletin paper
File Information	19_rjgshhs_24_p001-018_r.pdf



横山源之助の南米移植民論

馬 世 汶

要 旨

本稿は、横山源之助の南米移植民論に提示された移住者像を中心に、その南米移植民論を再検討するものである。

第一章では、横山の社会・労働運動論と南米移植民論との関係、および横山の南米移植民論が提起した思想の経緯について検討する。労働運動の指導者たちに対する懷疑で、運動から離脱した横山は、日露戦争の勃発をきっかけに、「人民」の海外膨張を唱え始めた。その方向は南米大陸である。そして、横山の南米大陸に期待を寄せた理由の分析から、その南米移植民論には「生活難」の解決策と日本の移植民や経済膨張の一翼という二つの側面が同居していたこと、を明らかにした。

第二章では、横山の南米移植民の展開について、彼の求めた移住者像を中心に論じる。日墨協同組合の事跡報告、および現地調査のもとにブラジル移植民活動の展開過程における問題点に触れ、その改善を求める横山が思い描き、また移住者に期待したのは、「同化の力」、永住意識、「独立自営事業」の経営志向、協同精神と移住者同士の組織化、の四点である。中でも、「独立自営事業」の経営志向、協同精神と移住者同士の組織化が横山の経済的ナショナリズム、つまり南米大陸での日本の商業貿易ないし経済産業の基盤の構築や拡大の構想と関わりところが、健全な移住者を求める彼のねらいだったこと、を指摘した。

結論として、横山の思想上の転換点である南米移植民論は、その出発の段階から、日本の海外膨張と密接にかかわること、彼の南米移植民論の中に、従来の社会・労働問題解決の意図がなお存在しつつも、日露戦争後に芽生えた海外膨張という思想のベクトルに抑えられ、希薄化していったこと、を指摘した。

はじめに

本稿は、横山源之助（一八七一—一九一五）の南米移植民論に提示された移住者像を中心に、その南米移植民論を再検討するものである。

近代日本の下層社会問題の研究者である横山は一九〇一年一月から一九一五年六月の死去まで、移植民にかかわる数多い論説・調査報告と三つの単行本を執筆し、移植民問題に並々ならぬ関心を払った。

横山の思想における重大な転換点ともいえる移植民問題への関心について、従来の研究では労働問題そのもの、および壊滅した労働運動の解決策としてとらえる傾向が強い。例えば、遠藤興一は横山の移植民論を「労働運動によらざる労働問題の解決策」として位置づけている^①。立花雄一も「横山が殖民問題に後半生をかけた理由は閉塞した労働運動―つまりは社会・労働問題の解決が国内に行き詰った、その打開策としてであった」と指摘した^②。また、近年の加賀谷真澄の比較思想史の論文でも、横山の移植民論は「貧困や労働者問題の解決策」だったとの見方がなされている^③。だが、このように横山の移植民論を労働問題や壊滅した労働運動の解決策だったとする先行研究の見解は、全くの的外れではないにせよ、日露戦争前後の横山の思想の変化を抜きにした一面的なものと言わざるを得ない。そもそも、この時の横山が提起した移植民論はもはや単なる社会・労働問題を解決するために出されたのではなくて、日本の

海外膨張ないし経済活動の拡張とも密接な関係があると思われる。

また、これと関連して、横山の移植民論の最終の目的は果たして遠藤や加賀谷が指摘したように^④、労働者の生活改善や労働条件の向上にあったか、疑問である。横山は移住者に何を求めたのか、理想的な移住者像としてどのようなものを思い描いていたのか、といった移植民論の文脈に沿って、遠藤と加賀谷の見解を改めて検討する必要があるだろう。

そこで本稿は、横山の移植民論の核心である南米移植民論を取り上げて、いままでの先行研究で触れていない横山の南米移植民論に提示された移住者像を析出したい。この作業によって、横山にとって南米移植民活動の意義はどこにあったのか、そして日本の統治権力が及ばない移住地に根を下ろすべきとされた健全な移住者と日本の対外発展との間の関係とはどのようなものだったのか、といった近代日本の南米移植民論の一端を明らかにしたい。

なお、本稿の用語について簡単に説明しておきたい。横山は「植民」・「殖民」・「移植民」などの言葉を使う時、これといった説明なしに混用する場合が多い。この混用からの煩瑣を避けるために、本文においては「移民の段階を過ぎて、殖民の境域に入った」^⑤という両者の連続性を捉える横山の理解に沿って、彼の論説に使われた「移植民」の表現を用いる。ただし、史料の引用の際には原文のままにする。

一 横山の「労働運動論」と「南米移植民論」

(一) 横山の労働運動への疑念と労働運動からの離脱

一九〇一年三月、農商務省から委託された職工事情調査を完了した横山は、再び労働運動に携わった。しかし、一八九九年の労働運動の活発な状態と違って、復帰した後の労働運動は明治政府の弾圧によってすぐ潰滅の状態に陥った。

一九〇〇年三月、日清戦争後の労働運動や社会主義運動などの新しい状況に対処するため、第二次山県内閣はすべての結社・集会・ストライキを取り締まる治安警察法を制定し、両院で通過させた。

この治安警察法の衝撃を受けて、片山潜（一八五九—一九三三）や高野房太郎（一八六九—一九〇四）などの労働運動の指導者の間では、労働運動の路線、すなわち労働組合運動を政治運動の方向に推進するかどうかをめぐって、対立が表面化する。同年六月の鉄工組合の本部委員会大会において、高野の労働組合改革法案が撤回されたことを契機に、労働運動は片山潜が唱えていた政治運動の方向へと推進されることになった。八月、組合運動に前途を見いだせない高野は労働運動から離れ、清国に渡った⁽⁶⁾。こうした初期労働運動の指導者層の内部分裂は、横山を労働運動の路線選択という思いもよらない状況に追い込んだ。具体的にいえば、片山潜およびその主導下の『労働世界』の主張と歩調を合わせ、労働運動の政治運動化で労働問題を解決するか、それとも、明治国家体制との正面衝突を回避し、他のもっと穏やかな方法で労働問題の解決を目指すか、と

いう選択である。

一九〇一年四月、横山は『労働世界』に「従来の職人諸君に望む」と題する最後の論説を「七顛八起楼主人」のペンネームで発表した。この論説の中で、彼は労働者に対する団結の重要性を引き続き強調し、職人同士の同職種の組合の結成を呼びかけた⁽⁷⁾。同年八月二十四日、東京の神田青年会館で開催された夏季労働懇話会に出席し、設立委員の一人に選ばれた横山は、この労働懇話会との接触を通して、九月一〇日に大井憲太郎（一八四三—一九二二）などの旧自由党左派が組織した大日本労働団体連合本部に加入した⁽⁸⁾。だが、片山潜が唱えた労働運動の政治運動化と対立した大日本労働団体連合本部は労資調和路線を取り、「極端ナル理論（社会主義——引用者）ニ心酔シテ、敢テ漫リニ資本家ヲ敵視シ、労働運動ノタメニ生産社会ヲ壊乱」することに批判的な態度を示した⁽⁹⁾。こうした大日本労働団体連合本部の主旨、および横山と『労働世界』や大日本労働団体連合本部との関係から見ると、横山の思想と実践が大きな転換期を迎えていたと思われる。すなわち、思想の上では従来の『内地雑居後之日本』で見た普通選挙と社会主義に関する主張を放棄し、実践の上では『労働世界』から離れ、大日本労働団体連合本部と提携する道を選択することになった、といえる。

注意しておきたいのは、右の大日本労働団体連合本部で活躍した頃、横山が次第に移植民問題に関心を寄せていたことである。横山の回想によると、彼は一九〇二年の夏に、二、三の友人と無人島の開拓を計画して失敗した⁽¹⁰⁾。その後、横山は移植民問題に関する最

初の論説である「移民雑誌（上、下）」を同年一月に雑誌『新小説』に連載した¹¹⁾。また、同じ時期に、横山と親しかった片山潜も移民のアメリカ渡航を積極的に推進し、渡米活動の一環として渡米協会を設立するとともに、一九〇三年にアメリカのテキサス州に稲作する計画を定めた¹²⁾。こうした横山と片山の動向から見ると、移民活動への関心は、初期労働運動が崩壊した後、一部の労働運動の提唱者たちが社会・労働問題を解決しようとする一種の新たな試みであつた、と推測できる。

前述したように、労働運動に戻つた横山は、思想と実践の両面において、常に不安定な状態にあつた。その具体的な原因については確定できないが、社会主義路線と労資調和路線の両方への懷疑が、おそらく一つの重要な原因であろう。一九〇四年一月一日の「生活問題」という文章で、彼はただ「欧米学者の所説を披露」するだけの日本の社会問題に関する議論の現状に疑問を抱き、労資調和路線や社会主義路線と距離を取ろうとする姿勢を示した¹³⁾。実は、前述したような社会問題の研究者が唱えた理論と日本社会の現実とが乖離しているのではないかという疑念は、労働運動から離れる前の一八九九年の横山の論説にすでにみられる。

今日我国に労働運動初れりと噂す、然れども余輩は外国に行はる、労働運動の影法師を認むるのみ、未だ日本の労働者が現在境遇しつ、有る其の不幸を憫み、深く我国の社会組織を研究して之に依りて起る労働運動を見ること能はざるなり、噫¹⁴⁾。

而して一方に於ては社会主義、社会改良主義の是非学者の間に
行はる、労働運動最終の解釈として主義を執れに取るべきか、
異なる哉日本の労働運動は、僅に初幕を開きて既に先導者の間に
社会主義の可否行はれ、思想の方面は遙に欧米の天地と接近
せんとす〔略〕¹⁵⁾。

このように、横山は労働者の「不幸を憫み、深く我国の社会組織を研究して之に依りて起る」日本の労働運動の独自性を見失つて、主義の争いに陥る労働運動の指導者に失望の念を表明した。こうして、この労働運動における理論と現実の乖離に失望した彼は『内地雑居後之日本』における普通選挙と社会主義に関する主張を放棄し、労資調和を唱えた大日本労働団体連合本部に接近したのではないかと思われる。しかし、労資調和路線にも疑念を抱いていた横山は、やがて大日本労働団体連合本部からも離れ、社会・労働問題を解決する新たな道である移民活動に携はることになる。

（二）「世界の集中心」である南米大陸

一九〇四年三月、日露戦争の戦況がまだ不明な状況において、横山は「布哇の本邦移民」という文章を発表した。この論説で、彼は「知らず、日露戦争後の布哇移民は、如何なるであらうか、国家の発展は、人民の膨張と伴はねば何にもならぬ、満洲出稼は、日清戦争後の事であるとすれば、自分は、日露戦争後に於ても、著しき現象を示すことであらうと、深く数年の後に希望を属してをる」と説い

た¹⁶⁾。また、同年五月一日の「殖民上の新大陸」では、「戦争は、一時的現象なり、国家の発展たる殖民問題は、百年の事業なり、余輩は、戦争の捷報を耳にする毎に、ますます常に殖民を説くの急要を感ず」と繰り返して「殖民問題」の重要性を説いた¹⁷⁾。

こうして、横山は「国家の発展」と「人民の膨張」をセットにして、近代東アジアにおける従来の国際秩序を変えた日清・日露戦争を日本の海外膨張の気運を助長する契機として重要視していたのである。一方、南米大陸が日本将来の発展地にとらえ、南米への移植民活動を日本第一の着眼点とすべきことを日本国民に訴える横山は、同じく五月一日の論説で国民の「大発展」に関わる南米移植民活動を実現するために、「満韓の東洋方面は暫らく措き」、とも述べた¹⁸⁾。もちろん、「満韓の東洋方面は暫らく措き」という横山の表現は決して彼が満州と朝鮮への移植民活動に無関心だったことを意味するわけではない。この点について、横山は一九〇五年七月一日に発表した「移民界の活動者」(三)で次のように論じている。

国威国光を喜ぶ帝国主義者、及之に近かき一派は、日露戦役後を想像し、満韓の拓植に無限の希望を懷いて居る。余輩もまた戦争の実を完ふせんが為に、大に満韓拓植の事実の挙らんことを冀望する者である。が、之と同時に、殖民的膨張の意味よりして、余は、南米大陸の前途に、至大の希望を置いてゐる¹⁹⁾。

いいでは、一九〇四年五月一日の「満韓の東洋方面は暫らく措き」

の論調とやや異なり、「戦争の実を完ふせんが為に、大に満韓拓植の事実の挙らんことを冀望」するのと同時に、「殖民的膨張の意味」から南米への移植民事業に「至大の希望」を寄せていたことが分かる。では、横山はなぜ「殖民的膨張」の方向を南米大陸に定めたのだろうか。それはまず社会・労働問題の解決策に立脚して、移住地である南米大陸が世界中で占める重要な地位という横山の判断による結論である。一九〇六年に出版された『海外活動之日本人』の序言において、横山は「余は我国の生活状態に意を潜むること爰に年あり、而して生活問題解決の一策として、移植民問題の世に盛んならんことを欲する者」と自称しながら、「生活問題」の見方から「常に南米拓植の利多きを信ずる」と明言した²⁰⁾。横山のいう「生活問題」は後に上梓した『南米ブラジル案内』でも言及しているように、「生活難」のことを指すだろう。この著作において、横山は日本国民が「海外移住を試むるに至つた」原因について、「人口の増加と生活状態の逼迫とが、海外発展の形式となつたもの」だとしつつ、日清・日露戦争後の物価の騰貴、農業労働者収入の低落、国民の租税負担の増加の度合いをデータで説明したうえで、「国民の多数が生活難を海外に補はん」とした結果であるとの見解を示した²¹⁾。こうした「生活問題」に立脚し、「南米拓植の利多き」を信ずる彼は、移住地である南米大陸の地位について、次のように述べている。

南米大陸は今や世界の集注点となり、殖民に志ある者、洋の東西を問はず、皆南米大陸に注目するに至つた。特に新進の氣に

富める独乙の如きは、伯刺西爾を初め、智利其他に勢力を扶植し、英吉利が阿弗利加、濠洲等に勢力を示せると相對して、居然たる實力を備ふるに至つる。たゞに独乙のみならず、南米に對して、常に超然たりし北米合衆國の如きも、三四年来俄に注意を加へ、陰に陽に南米の時事に關係し「中略」異日パナマ運河が落成するに至れば、今日極東が世界の舞台となつて居ると同じく、南米大陸は殖民地として、貿易地として、世界の大富庫を以て、目せらるゝてあらう。否、殖民地として、既に前述の如く世界の集注点となつて居るのである²³⁾。

一九〇九年七月の雑誌『太陽』に發表された「南米研究」でも横山は同じ趣旨の内容を次のように書いてゐる。

貿易又は殖民等より世界の殖民史を繙いて見ると、殖民地の人氣は屢々變動してゐる。嘗て「印度」は世界殖民者の視線を集めたことがある。「北米本土」が世界の人氣となつたこともあり、「濠洲」及「南洋諸島」は一世の人氣と爲つたこともあり、十九世紀の下半期に入つて、一時「南亞米利加」は世の視線を集めた走馬燈のやうにくるくる變つてゐる。「中略」一ト度勢力範圍が定ると、世界の視線は他の新天地に移るのである。而して二十世紀の視線——今日の人氣問題は那処に移つたかといへは南米大陸である。従つて世界殖民家の注目は南米大陸の一点に集つてゐる²⁴⁾。

横山によると、「殖民地」の人氣はしばしば變動するもので、靜的なものではない。インド・北米・オーストラリア・南洋諸島・南アフリカは、かつての「貿易地」・「殖民地」として世界の注目を集めた。だが、これらかつての「貿易地」・「殖民地」での勢力範圍の確定や時勢の推移に伴い、來たる二〇世紀の「貿易地」・「殖民地」になる潜在力を備へるのが「世界殖民家の注目」する南米大陸である。これがドイツやアメリカなどの欧米列強が、南米に關与し、南米大陸で次々と勢力範圍を拡大しようとする理由だと、横山はみたのである。くわえて、もしパナマ運河が他日に開通するなら、南米大陸の國際的地位は必ず從來以上に向上し、終に「今日極東が世界の舞台となつて居る」のと同じ地位になると横山は予想したのであつた。そして、近年の「新聞雑誌に南米談が見へて來たのは我國が世界の舞台に入つた象徴で、世界の氣勢が我國を伴ふて南米大陸と手を握らせた」のだと書いてゐるやうに、横山にとって、日露戦後の日本國內の新聞雑誌を賑わした南米大陸に關する報道は膨張する日本の象徴でもあつた²⁵⁾。とはいつても、当時の日本と南米の條約國との移植民や貿易などの關係は「米独英仏其の他西、葡等の南米諸國に對するもの」と比べて、「一枚の白紙、何等の意味にも現はれて居らない」ありさまである、というのが横山の現状認識であつた²⁶⁾。ただ、このような日本と南米諸國の關係が「何時までも白紙に留まつて居るものでない」と信じる横山は、「世界の視線は悉く南米の地に集つてゐる、我國獨り世界の風潮外に立つことができた天下泰平である」²⁶⁾という反語的な表現で日本の南米への積極的な關与を呼

びかける。

また、南米大陸が日本人の移住地になる可能性への横山の確信の裏には、彼なりの現実に即した合理的な判断があった。一九一三年一月、横山はその最後の著作である『南米ブラジル案内』の概言の部分に「移植民地の良否を決する」三つの条件を挙げ、日本人移住者の適地について議論している。

蓋し移植民地の良否を決するには、数個の条件が備はるを要す。

一は賃金の良好なることである。二は気候風土の善良なることである。三は人種の好悪なきことである。朝鮮満洲の如きは、殆ど日本内地同様で、絶好の移植民地であるが賃金は日本内地と大差がないから、労働者の出稼には、必ずしも絶好の地とは見られぬ。蘭領インドの如き、或は馬來半島の如き、同じく好發展地に相違ないが、気候風土に非難があるのは遺憾である。例令気候風土又は賃金に遺憾がないとしても、若しその国にして、日本人を歓迎しなかつたら、何にもならぬ。北米合衆国の如きは正に其の適例で、好移植民地の称がある濠洲、加奈陀、南阿連邦、悉くそれである⁽²⁷⁾。

横山は「労働者の出稼」というねらいから、日本内地の賃金と大差がない「朝鮮満洲」を「必ずしも絶好の地とは見られぬ」と明言したのである。おそらく、先に指摘した「満韓の東洋方面は暫らく措き」という一九〇四年五月の横山の主張にはこうした移住地での

「賃金の良否」についての判断があっただろう。また、人種排斥への懸念からアメリカ・オーストラリア・カナダ・南アフリカ連邦を日本人移住者の適地から除外したのは、横山にとって一つのやむを得ない判断である。特にアメリカの西海岸での日本人移住者に対する執拗な排斥に対して、横山はかねてから次のようにみていた。第一に、アメリカでの日本人移住者に対する排斥運動が、中国人移住者に対する排斥の波及を受ける一方で、人種問題にもつながっている。

第二に、「東洋労働者」との労働競争におけるアメリカ労働者の劣勢とこれらの労働者の不満を利用し、労働者の支持を得ようとするアメリカの政治家たちの挑発が、さらに彼ら労働者たちの不満を増幅させ、アメリカの排日運動をますます病的な状況に発展させた⁽²⁸⁾。

また、一九〇六年一月一日に発生したサンフランシスコ市の日系移民の学童に対する隔離事件とそれを解決するために日米両国が締結した「日米紳士協定」は横山にとって、「日清日露戦争の刺激」を受けて盛り上がった日本国民の「海外移住の風潮」を遮り、日本「国民の前途に一張の黒幕を張った」一大事件である⁽²⁹⁾。

右の三つの判断基準に沿って、横山は南米大陸、特に「世界の大殖民地で、気候風土に遺憾なきのみならず、人種上の好悪なく、双手を挙げて日本人」を歓迎し、かつ「賃金の良好」なブラジルが絶好な移住地であると位置づけた⁽³⁰⁾。

(三) 小括

以上、本章では、横山の社会・労働運動論と南米移植民論との関

係、および横山の南米移植民論が提起した思想の経緯について考察してきた。治安警察法で壊滅状態に陥った初期労働運動に復帰した横山は日本社会や労働者に関心が薄く、欧米の理論に心酔した労働運動の指導者たちのありさまに対する懷疑により、思想と実践の両面において揺れていた。その結果、彼は労働運動から徹底的に脱退して、日露戦争の勃発をきっかけに、「人民」の海外膨張を唱え始めた。その海外膨張の方向は日本から遠く離れた南米大陸であった。

横山が南米大陸に期待を寄せた理由は二つある。その一つは、「生活難」を解決しようとする問題関心から「南米拓殖」の利益が多いと信じたことである。もう一つは、南米大陸を「世界の集中心」になるという見方に基づき、ドイツとアメリカが南米への積極的な進出を試みているように、日露戦後の日本もこの「世界の風潮」に乗るべきだという「国家の発展」の欲望にあった。つまり、横山の南米移植民論には「生活難」の解決策と日本の移植民や経済膨張の一翼という二つの側面が同居していたのである。ちなみに、その期待の裏には賃金・気候や排日運動などの現実に対する顧慮があったことも見過ごすべきではない。

二 横山の南米移植民論の展開——その移住者像を中心に——

(一) 日墨協同組合と「同化の力」

行動主体としての移住者は、移植民活動の推進力である。した

がって、如何にして日本の植民地や勢力範囲以外の移住先に安定的な移植民勢力を築くか、という課題は、移住者の受け入れ国が他国の移住者に対して取る態度や政策によって決まるだけでなく、移住者自身が移住地の社会や文化などに融合できる能力を持っているかどうかにも関わるものである。そこで、移住者に対する移住先の状況が極めて流動的である中、移住地の「国風」「土地・風習に「同化」する「同化の力」という移住者の能力の重要性を、アメリカの排日運動を直視した横山は繰り返して呼びかけた。

横山が関心を寄せた「同化の力」の一例として、メキシコでの日本人「植民地」を経営する日墨協同組合の活動に注目したい。日墨協同組合は一九〇一年に照井亮次郎（一八七四—一九三〇）・清野三郎（生没不明）・高橋熊太郎（生没不明）ら六人が、榎本武揚（一八三六—一九〇八）の移植民事業を継承したうえで、移住先に「新社会の形成を目的」としてメキシコのエスキントラに設立した「植民地」である³¹。横山の描写によると、日墨協同組合が「植民地」の経営においては、「社会主義的思想を汲んで、協同主義」の理念に沿って、「個人の所有財産を排して、その所得、資本、財産を挙げて、一切日墨協同組合の計営」に委ねる方法がとられていた³²。この経営モデルのもとに、日墨協同組合は土地開拓・「エアグアルチェンテ（酒精）及び甘蔗の工場」の設立や雑貨店の経営などの「事業拡張の傍ら、日本人の繁殖に力め、墨国人を娶って家庭を作るに甘んぜず、機会ある毎に日本人をエスキントラに招致し、大和民族の発展」に努めていた。こうして、一九〇一年から一九一〇年までの一〇年

間の発展を経て、日墨協同組合が所有した土地の面積は最初の四〇町歩から一〇〇町歩に拡大し、人口も元来の九人から三〇人以上に増えた³³⁾。一見あまり目立たないこの成績が横山にとって大きな意味があったようである。横山によれば、太平洋沿岸・ハワイ・ペルー・ブラジル・オーストラリア・南洋諸島に散在する日本人が三〇万人以上に達しても、到底「堅確なる基礎の下に異人種と調和して、殖民地を作つてゐるものは、幾何もない」。そして、日墨協同組合がまさしく、その「幾何もない中の一つ」であつた³⁴⁾。

また、この日墨協同組合が移住先に「堅確なる基礎」を作つた理由について、横山は各組合員が「墨国人の家庭に満足し、墨国人と同化してゐる」その「同化の力」にあると結論づけた³⁵⁾。ちなみに、異邦人と「調和」・「同化」することで移住先に安定的な勢力が築けるということを日本人移住者に留意させようとする横山は、ブラジルへの移殖民事業がまだ計画中の一九〇六年から、ブラジルの「国風に同化すべし」といふ精神上的の注意」の重要性を日本人移住者に繰り返し力説した。この点について、彼はイタリア人を例として説明した。横山の見方によれば、イタリア人の勢力がブラジルのサンパウロ州の至るところに充満する原因は、彼らイタリア人が「伯国の国風に同化することを忘れず、伯国の国語に熟練するに力め」ることにある。換言すれば、「伊太利人は能く海外発展の真意を解せるもの」という³⁶⁾。特筆すべきは、横山がこの「同化の力」の有無をつねに出稼ぎ移民の不利益ないし移住地での排日問題と関連づけてとらえていることである。

有り体に言へば、賃金取を目的とせる出稼移民は、移民業者の営業より言へば、或は利益あるかは知らないが、移民政策より言へば、必ずしも大した利益ある者でない。今日北米本土又は布哇に、日本人は数万を以て数へられてゐるに拘らず、常に白人種の侮蔑を受けてゐるのは、出稼移民の群集で、その土地と風習に同化する殖民の渡航を見なかつた最初の誤謬である。今日伯国に伊太利人百万人を以て称せられてゐるにも拘らず、尚ほ伯国の地に伊太利人の勢力現著^{マツ}ならぬのは、同じく移民のみ多くして、殖民の渡航が寡い為であらう³⁷⁾。

このように横山は、「移民政策」の立場から、賃金の獲得を目的とする出稼ぎ移民が「必ずしも大した利益ある者でない」ことを断言し、北米・ハワイにおける日本人に対する「白人種」の排日運動の原因を彼ら出稼ぎ移民の移住先の「土地と風習」への同化能力に求めたのである。移住地で強固な基盤を築くことができない出稼ぎ移民より、「土地と風習に同化する殖民」のほうがもつと堅実である、というのが横山の考え方であつた。

(二) ブラジル移殖民事業の問題点とその矯正

一九一二年三月、横山は横浜で、第三回の日本人移住者を送り出す厳島丸に乗船して、ブラジルに向けて出航した。四月二七日、彼は日本人の移住者とともにブラジルのサントス港に上陸し、三日間の短い休憩を経た後、サンパウロ市内外のコーヒー耕地などで活躍

している日本人移住者の状況についての調査に着手した。同年九月、横山はブラジルから離れ帰国した。この約五ヶ月の現地調査で、彼は数十余篇の調査報告を完成した。その中でも、八月三〇日の『新日本』に掲載された記事は注目に値する。この記事で横山は、ブラジルの日本人の移植民事業の中に存在する問題に力点を置いて分析し、次のように五つの問題点を指摘した。すなわち、「(一) 社会的自覚なき事、(二) 年月を重ねる毎に送金又は貯金の減少する事、(三) 社会的設備を欠ける事、(四) 地方割拠の弊ある事、(五) 総領事館は在伯日本人と没交渉なる事」、である⁽³⁸⁾。

この指摘から明らかなように、ブラジルに駐在する日本政府の派出機関と関係する(五)を除き、残る四点はすべて前に到着した日本人移住者に関する指摘である。特に(二)、(四)について、横山は繰り返して言及し、ブラジルの日本人移住者の注意と矯正を求めた。以下、上述の五つの問題点に関連して、横山のほかの論説と絡めながら詳論する。また、第二点の分析はやや長いため、最後に回すこととする。

第一の「社会的自覚なき事」について、横山はブラジルに渡った日本人が「日露戦役後一等国民の光榮」を負う「新移民」であると指摘した後、「サンパウロ州に於ける日本人は、何等一等国民の自覚なく、歴史なき系統なきサンパウロ市の浮華的繁華に眩惑せられて、伯国を以て世界第一等国なりと思惟しつゝ、ある」と、日本人の誇るべき「一等国民」の世界的な地位への無自覚を批判した⁽³⁹⁾。

第三の「社会的設備」が欠けていることについて、横山は「伯国

日本人の間に未だ一の社会的設備なき」ことに遺憾の意を表し、「誘惑多き」サンパウロ市にアメリカやカナダやハワイの「日本人会」のような「共同の機関を設けて、日本人相互の権利と利益と」を謀る「社会的設備」の大切さを指摘した⁽⁴⁰⁾。

第四の日本人の地方割拠の弊害については、異なる県の移住者の間の「割拠の弊」が、土地の開拓・商店の経営などの共同事業の発展を阻害していると指摘する⁽⁴¹⁾。また、ブラジルの現地調査が終わって帰国した後に完成した『南米ブラジル案内』で、横山は「伊太利人がサンパウロ州に一大勢力を示し、独乙人は植民に基礎を築いてゐるのも、皆な相互扶掖の結果である。土耳其人が行商に地歩を占めてゐるのも、やはり団結の勢力」にはかならないと述べた⁽⁴²⁾。そのように移住者同士の間での扶助・団結で共同事業を起こすイタリア人やドイツ人と対照的に、日本人は「精神的又は経済的の結合」による「共同事業」に不熱心で、出身地への執着を乗り越え、生産・消費組合を設立して移住者同士の間での共同事業を構築することによって、思想・経済上の真の結合を実現すべきであると横山は提言した⁽⁴³⁾。

第五の「総領事館は在伯日本人と没交渉なる事」について、横山は「日本公使館兼総領事館は、僅に移民会社代理店と一条の連絡あるのみにして、在伯日本人と風馬牛^{ふうばぎう}ならざる」状況を嘆いた⁽⁴⁴⁾。こうした在外の日本人移住者に必要な配慮を怠る領事館の無関心は横山のかねてから批判するところであった。一九一〇年の「醜業婦は邦人の南洋発展を斯く領事以上に助く」という論説で、横山は海

外の日本移民に便利を提供する二つの機関である海外売春婦と領事館の役割を比較しながら、「無冠の領事」である海外売春婦と比べて、「在留邦人に便宜を与ふる事務官」として「在留日本人」を抱合すること、日本の「海外の発展」を図るべき領事館の不親切・無能や海外の国民と何らの交渉がないことに口をきわめて非難した⁴⁵。

最後に、第二の日本人移住者の送金と貯金の問題を取りあげる。

この問題について、横山は「送金に熱心なる日本人は、年月を重ねる次第に、送金額の減少」する傾向をブラジルの「在留日本人の一大欠点たらずとせず」と非難しながら、「送金よりも貯金、貯金よりも事業を望む」とした⁴⁶。ここでまず、移住者による本国への「送金」の国家的な価値について確認しておきたい。移住者からの送金が国家の経済利益になるかどうかは移植民問題に関心を持つ論者の間によく議論された話題である。新渡戸稲造（一八六二—一九三三）と田島錦治（一八六七—一九三四）の門下生で、南米移植民論を唱える大河平隆光（生没不明）は一九〇五年に大学へ提出した卒業論文の『日本移民論』に、出稼ぎ移民の送金は一種の無利子の「外資輸入法」でありながら、その「年々収納」の状況が「恰かも外国に債権を有する」ようなものだととして、移住者の送金の経済利益を大いに評価した⁴⁷。大河の分析と異なり、河田嗣郎（一八八三—一九四二）はその一九一四年の著書である『植民地としてのブラジル』に、もし移住者の送金額の中から「国を出る時持て行く金其渡航に費す」旅費、および移住者の国内での「働より生ず可き富」を控除すれば、「移民が金銭上本国の経済に貢献する所は幾何もない」と、

送金の経済利益が「僅少」だとした⁴⁸。見解がはっきり分かれる難しい問題であるため、ここでは判断を留保し、今後の課題としたい。

先の引用文から分かるように、横山の場合は、送金の経済利益の如何より、移住者が移住先での労働で儲ける賃金を事業の立ち上げのための資本金として使用することがより重要だと考えていた。右の現地調査報告の前に執筆した「南欧移民と日本移民」の中で、彼はブラジルの移民収容所における「南欧移民」と「日本移民」を観察して比較したうえで、移民収容所内の「日本移民」が「服装に於ても、知識に於ても（日本移民に新聞紙を読み得ざるもの殆ど寡なし）、はた人格に於ても、日本移民は移民収容所内の紳士」であり、「サンパウロ州政府の補助金で辛うじて渡航し得た」南欧の「乞丐」「窮民」「放浪者」の比べものにならない、と述べた。ところが、横山によれば、「乞丐」「窮民」「放浪者」とみなされた彼ら「南欧移民」は「五年十年或は二十年の後には、皆な一ト廉の商人となり、企業家となり、且つ紳士となつてゐる」という。こうした「南欧移民」の様子と異なり、送金に熱中する「日本移民」は「たゞ其れだけである。送金者があるといふ丈けである。到る処、新村落と新市街とを作りつゝある伊太利移民等」に及ばないのである⁴⁹。こうした違いの要因について、横山は次のように論じている。

日本移民は送金に熱心し、伊太利移民等は貯金に熱心してゐる。送金に熱心なのは、故郷の父母弟妹を忘れない為で、貯金に熱心するのは、異日独立の地を作らんが為であらう。伊太利

移民は永住の傾あるに反して、日本移民は常に本国を忘れないのも、貯金と送金とに別れてゐる所以であらう。「中略」⁵¹開は兎もかくも、伊太利人は目的を永遠に期し、独立自営の為に、貯金に腐心してゐるのは、殊勝といはねばならぬ。余は、伊太利人に与せんとするものである⁵²。

すなわち、貯金と送金の区別はその目的の違いにある。貯金に熱中するのは「独立自営事業」の構築ひいては永住の実現を目的とするからであり、送金に熱心なのは帰国を最終の目的とするからである。横山は日本人移住者の送金に対して反対の態度はとらないまでも、「送金に熱中してゐる」背後に「目的の遠大でない」反証があり、それはまた「故郷忘じ難き感情」、「帰国を急ぐ弱い弱心」の現れと見た⁵³。そこで、「送金に熱中せず、十年乃至二十年の後、独立の事業を起すのを唯一の目的」とするイタリア人の在り方を日本人移住者に倣わせようとする横山は、移住者が移住先で独立自営事業を構築したり永住を実現したりすることの重要性を強調したのである⁵⁴。

この永住・「独立自営事業」の構築の重視は、先にも言及した移住先で「土地と風習に同化」できるかどうかの問題がそうだったように、横山の移民と「殖民」の認識を考える時の一つのポイントである。彼は一九一四年の「政府事業の形ある伯刺西爾拓植会社の日本殖民地の実際」という文章に、ブラジルへの日本人の入国者を「賃金取目的の移民」と「永住を目的とせる殖民」とに明確に二分した。

だが、両者は決して相容れない関係ではない。例えば、ブラジルのコーヒー耕地から離れた「独立の農業に従事してゐる者（日本人移住者——引用者）」がすでに「移民の段階を過ぎて、殖民の境域に入つた」という横山の描写から分かるように、両者の間に連続性がある⁵⁵。まとめていえば、横山が想定した「殖民」は、移住先の「土地・風習」に同化して、かつ独立自営の事業を構築する（永住者）のことであり、出稼ぎ移民と対置される概念であつた⁵⁶。

また、永住の問題について、前にも触れた大河と、教育家でブラジルの移殖民事業にも関与した永田稠（一八八一—一九七三）も横山と同じように、北米における日本人移民排斥の原因を出稼ぎ移民の移住地の住民や風俗習慣に同化する意思の薄弱さにあるとみて、出稼ぎ移民より永住の決心がある殖民の養成を極力に唱えた⁵⁷。だが、「永住」と「参政権」の獲得問題に踏み込まなかつた横山や永田の姿勢と異なり、大河とジャーナリストの竹越与三郎（一八六五—一九五〇）はこの問題を正面から取り上げた。大河は移住先の「参政権を獲得と欲する者」が少ない原因を出稼ぎ移民の「永住」意欲の低下と直接に結びつけて考えた⁵⁸。そして、竹越は一九〇七年六月一四日の早稲田校風会で行つた演説で、中南米への「青年」の発展を呼びかけながら、次のように語つた。「日本人は其処（中南米——引用者）を我故郷としてです、其処に住み其処で結婚し、其処に子を生み、而して其処に日本の部落が自然と出来ることは、是亦何人も奈何とすること出来ぬことと思ふ。而して其人が勢力を得て代議士ともなり、大統領ともなつて、而して日本の血液を有つて居る

人が大統領となつて教書を発する」⁽⁵⁷⁾。竹越は「中南米」における「日本の部落」の形成や参政権の獲得で「代議士」ないし「日本の血液」を有する「大統領」の選出をやや楽天的に語つたのである。

(三) 南米移民活動と経済的ナショナリズム

以上の(一)と(二)から明らかなように、横山は移住先における移住者たちの経済活動に並ならぬ関心を払っていた。では、このような関心の背後に、どのような思惑があつたのだろうか。以下、主に横山のいくつかの断片的な記述を列挙して、その一端を確認しよう。

今日我商品の輸送著しからざるは、日本品の一ト手販売者の観ある支那商人の入国尠きと、航路の遠隔なるが故にして、若し我汽船にして度々往復するに至らば、期せずして伯国内地に日本商品が散布せらるべし。余は伯国を以て移植民の発展地たるのみならず、我商人の発展地たらんことを望んで已まず⁽⁵⁸⁾。

(1)

移民向商品は南米貿易の全体に大した関係はないが、若し伯国に、亜国に、將た又た智利に、移民の数加はれば、我商品は激増するに違いない。移民は貿易の全触であるとは或意味にては明確なる真理である⁽⁵⁹⁾。(2)

母国より加工品を入れる、のも、日本帝国の利益の一に相違ない。併しながら関税其の他に煩瑣の手續を要する此の伯国の如きは、既製品を入れる、代りに、原料と職工とを以てして、貿易品の足らざる所を補ふの寧ろ得策なるに如かず。余輩は日本品の輸入を望むと共に、切に我が日本人に依りて、有らゆる工業の興らんことを望むものである⁽⁶⁰⁾。(3)

若し伯国の移植民を可とせば、国民挙つて伯国の新天地に意を向け、日本人の経済的基礎を一万二千哩外の地に定るに努むべし。而して独り労働者の奨励に止らず、中産者の来りて、伯国の産業に勢力を張るは、今日の急務たらずんばあらず。三千乃至五千の移民の輸送の如きは、啻に国家政策に裨益なきのみならず、移民自身の幸福に於ても多く加ふるものなけん⁽⁶¹⁾。(4)

横山は第一節でふれた南米大陸が二〇世紀に世界皆無の「殖民地」・貿易地であるとの認識に基づいて、南米のブラジルへの日本の移植民活動が本格的に発足した三ヶ月後（一九〇八年七月——引用者）の史料①で、ブラジルを将来の日本の「移植民の発展地」と「商人の発展地」とすることに期待を寄せる。むろん、横山の考え方では、この二つの目標は決して切り離せる関係ではない。「移民は貿易の前触」であり、ブラジル・アルゼンチン・チリにおける日本人移民の増加にともない、移民向けの商品が必ず「激増」するに違いない。だが、日本本土から直接に「加工品」を南米に輸出するだけ

では足りない。「独立自営事業」を重要視する横山が推奨したのは、それよりも、移住地の職工と原料を利用して、工業を起こし、自主的に商品の生産に取り組むことであつた。それは最終的におそらく史料④のブラジルでの「日本人の経済的基礎」づくりや産業勢力の拡張といった横山の発想とつながっていると思われる。それに、この横山の経済重視の論点は、「日本帝国の利益」や「国家政策に裨益」という経済的ナショナリズムの側面を含んでいることも看過すべきではない。

(四) 小括

以上、本章では、横山の南米移植民の展開について、彼の求めた移住者像を中心に論じてきた。日墨協同組合の事跡報告、および現地調査のもとにブラジル移植民活動の展開過程における問題点に触れ、その改善を求める横山が期待している健全な移住者は、日墨協同組合のような「殖民地」を築くことができる「殖民」である。それは、定住の決心をもって、移住地の「異人種」と「国風」に同化する「同化の力」を身につけると同時に、従来の送金の習慣を見直して、賃金を貯金し、それを資本金として、移住先における農業、商業ないし工業などの経営に投資することで「独立自営事業」の実現、つまり経済的自立を目指す移住者のことである。横山は、移住者同士の間の組織化と協同精神も不可欠とした。具体的にいえば、横山はこう呼びかけた。移住者同士は、いままでの日本人の同県割拠の氣風を払い、移住先の日本人の「権利と利益」を守る「共

同機関」である「日本人会」^②のもとで、共同事業の構築につとめる者同士の間の精神と経済上の真の結合に力を入れるべきである。そして、彼ら移住者の努力とともに、政府の派出機関である領事館も在外日本人の統合に尽力するべきである、と。また、右の移住者の経済的自立ひいては移住者同士の共同経済活動の基礎の確立への呼びかけが横山の経済的ナショナリズム、つまり南米大陸での日本の商業貿易ないし経済産業の基盤の構築や拡大と分ちがたく結びついている。このような南米大陸における日本の経済進出の基盤づくりが健全な移住者を求める横山のねらいだったと考えられる。

おわりに

以上、本稿では、横山の南米移植民論に提示された移住者像を中心に、その南米移植民論の再検討を試みてきた。以下、本稿で明らかにした点をまとめたい。

第一は、横山の求めた健全な移住者像についてである。横山が思い描き、また移住者に求めたのは、「同化の力」、永住意識、「独立自営事業」の経営志向、協同精神と移住者同士の組織化、の四点である。

第二は、横山の求めた健全な移住者と日本の対外発展との関係についてである。従来、各地域に散在した日本人の一時的な出稼ぎ移民の活動は、移住地での日本人に対する排斥運動を引き起こし、逆に日本の対外発展を阻害した、というのが横山の現状認識であつた。

したがって、どのような方法で将来の有望な「殖民地」、「貿易地」である南米大陸に「堅確なる基礎」を構築し、日本の対外発展を円滑にするかが、横山にとって、一つの課題であった。その時、彼が思いついたのは墨協同組合員のような健全な移住者のことである。横山の考え方では、彼ら対外発展の有力な推進者である健全な移住者の手で構築した「堅確なる基礎」を有する「殖民地」が日本の対外の経済進出の基盤づくりや経済勢力の拡張の安定的な拠点になると考えたのである。

第三は、横山の思想における南米移植民論の位置づけについてである。労働運動から徹底的に離脱し、明治国家の体制変革や社会改良で社会・労働問題の解決する道を放棄した横山は、やがて思想上において大きな転換点を迎えた。日露戦争が勃発した後、「国家の発展」という目的から「人民の膨張」の重要性を繰り返して唱える横山が打ち出したのが南米移植民論である。つまり、横山の南米移植民論はその出発の段階から、日本の海外膨張と密接にかかわるものだったといわなければならない。確かに、横山はその南米移植民論の中に、国内の社会・労働問題を解決しようとする従来の意図も押し込んだ。だが、注意しておきたいのは、国内の社会・労働問題の解決という彼の課題が、日露戦争後に芽生えた海外膨張という思想のベクトルに抑えられ、希薄化していったということである。南米大陸を日本の移植民や経済進出の適地として重要視した横山にとって「殖民的膨張」とは、南米大陸への積極的な関与という「世界の風潮」に乗ることを意味した。

注

(ま せいぶん・日本史学研究室)

- ① 遠藤興一「横山源之助とその時代(三)」『明治学院論叢』三〇七号、一九八〇年、六五―六六頁。
- ② 立花雄一「横山源之助伝―下層社会からの叫び声」『日本経済評論社』二〇一五年、四二〇頁。
- ③ 加賀谷真澄「明治の移民論―横山源之助、片山潜、幸徳秋水を比較して」『秋田県立大学総合科学研究集報』一六号、二〇一五年、六五頁。
- ④ 遠藤、前掲「横山源之助とその時代(三)」、六六頁、また加賀谷、前掲「明治の移民論―横山源之助、片山潜、幸徳秋水を比較して」、六八頁。
- ⑤ 横山源之助「政府事業の形ある伯刺西爾拓植会社の日本殖民地の実際」立花雄一編集『横山源之助全集』(社会思想社・法政大学出版社、二〇〇〇年―二〇〇六年、以下、『全集』)七巻、二二二―二三三頁。
- ⑥ 大田英昭『日本社会民主主義の形成―片山潜とその時代』日本評論社、二〇一三年、二八二―二九二頁を参照。
- ⑦ 横山源之助「従来の職人諸君に望む」『全集』三巻、一〇〇―一〇三頁。
- ⑧ 立花、前掲「横山源之助伝―下層社会からの叫び声」、二七一―二七八頁を参照。
- ⑨ 「大日本労働団体聯合本部趣意書」『印刷雑誌』一一巻八号、一九〇一年九月二八日。引用は労働運動資料委員会編集『日本労働運動資料』一卷、労働運動資料刊行委員会、一九六二年、六八四頁。
- ⑩ 大井憲太郎が一九〇二年に東京で海外移民調査会を立ち上げたことから、立花雄一は横山の無人島開拓計画が大井憲太郎の活動の延長線上にあったと推測した。立花、前掲「横山源之助伝―下層社会からの叫

び声』、二八三—二九二頁を参照。

⑪ 『移民雑誌(上)』の中に、横山は大井憲太郎がブラジル移民事業に従事する願望があったことを記している。この大井憲太郎のブラジル移民計画が横山の主張した南米移民論とどのような関係があるかはまだ考察する必要がある。横山源之助『移民雑誌(上)』『全集』七卷、一六頁。

⑫ 大田英昭の研究によると、テキサス州における片山潜の稲作計画は一九〇六年に始め、やがて失敗に終わった。一九〇七年、アメリカから帰国した片山は一九〇二年に結成した渡米協会を再建し、『渡米』『日米経済新報』という二つの雑誌を創刊し、アメリカへの移民事業の重要性を繰り返して強調した。大田英昭『一九〇〇年前後における日本の移民問題と片山潜』、小沢弘明・三宅芳夫編『移動と革命—ディアスポラたちの世界史』論創社、二〇一二年、一五四—一五六頁を参照。

⑬ 横山源之助『生活問題』『全集』四卷、六〇頁。

⑭ 横山源之助『社会雑誌』『全集』二卷、二九九頁。

⑮ 横山源之助『労働運動の初幕』『全集』二卷、三二—三三頁。立花雄一の解題によると、引用文中の「社会主義、社会改良主義の是非学者の行はる、労働運動最終の解釈として主義を執れに取るべきか」をめぐる論争は一九九九年七月九日の活版工同志懇話会において、片山潜と桑田熊蔵(一八六八—一九三三)・金井延(一八六五—一九三三)などの間に、社会主義と社会改良主義の問題をめぐる展開した論争である。立花雄一『解題』『全集』二卷、四六一—四六二頁。

⑯ 横山源之助『布哇の本邦移民』『全集』八卷、三六頁。

⑰ 横山源之助『殖民上の新大陸』『全集』七卷、三六頁。

⑱ 同右、三七頁。

⑲ 横山源之助『移民界の活動者』『全集』七卷、六四頁。

⑳ 横山、前掲『海外活動之日本人』『全集』七卷、三五〇頁。

㉑ 横山源之助『南米ブラジル案内』南半球社、一九一三年、六一—一〇頁。

㉒ 同右、三九七頁。

㉓ 横山源之助『南米研究』『全集』七卷、一〇九頁。

㉔ 横山、前掲『南米研究』、一〇九—一一〇頁。

㉕ 同右、一一五—一一六頁。

㉖ 同右。

㉗ 横山、前掲『南米ブラジル案内』、一一二頁。

㉘ 横山、前掲『移民雑誌(上)』『全集』七卷、一八一—一九頁。

㉙ 横山、前掲『南米ブラジル案内』、六頁。

㉚ 同右、一〇—一二頁。

㉛ 横山源之助『墨西哥南端の植民地に於ける日本教育家』『全集』八卷、二一〇—二一一頁。

㉜ 同右。

㉝ 横山源之助『墨西哥移民の熱心家日墨協働組合組織者照井君帰国す』『全集』八卷、一四二—一四三頁、また横山源之助『南米墨西哥国日本活動家事業』『全集』八卷、三七〇—三七二頁。

㉞ 同右、『南米墨西哥国日本活動家事業』、三七二頁。

㉟ 同右、三七二頁。

㊱ 横山源之助『不審議なる竹村商会』外務省伯国移民を助く』『全集』七卷、一三二—一三三頁。

㊲ 横山源之助『大隈老伯に寄せて伯国移民の現状を報ずる書』『全集』七卷、二〇〇—二〇二頁。

㊳ 同右、二〇〇頁。

㊴ 同右、二〇二頁。

㊵ 横山、前掲『南米ブラジル案内』、一一二—一一三頁。

㊶ 同右。

㊷ 同右。

㊸ 同右。

㊹ 同右。

㊺ 同右。

㊻ 同右。

㊼ 同右。

㊽ 同右。

- (44) 横山、前掲「大隈老伯に寄せて伯国移殖民の現状を報ずる書」、二〇一—二〇二頁。
- (45) 横山源之助「醜業婦は邦人の南洋発展を斯く領事以上に助く」『全集』四卷、三五二—三五五頁。
- (46) 横山、前掲「大隈老伯に寄せて伯国移殖民の現状を報ずる書」、二〇〇—二〇一頁。
- (47) 大河平隆光『日本移民論』文武堂、一九〇五年、一九三頁。大河平隆光の南米移民論については、小野一郎の先行研究がある。小野一郎『日本帝国主義と移民論—日露戦後の移民論—』『小野一郎著作集』三卷、ミネルヴァ書房、二〇〇〇年、第三節。
- (48) 河田嗣郎『植民地としてのブラジル』有斐閣、一九一四年、二二九—二三〇頁。
- (49) 横山源之助『大阪朝日新聞「ブラジル殖民事情調査報告」』『全集』七卷、二九八頁。
- (50) 横山、前掲『南米ブラジル案内』、九八—九九頁。
- (51) 同右、一一一頁。
- (52) 同右、一一一—一二二頁。
- (53) 横山、前掲『政府事業の形ある伯刺西爾拓植会社の日本植民地の実際』、二二二—二二三頁。
- (54) 塩出浩之は「永住」論自体は出稼ぎ批判として一八九〇年代から存在した」と指摘した。塩出浩之『越境者の政治史—アジア太平洋における日本人の移民と植民—』名古屋大学出版会、二〇一五年、一三九—一四〇頁。
- (55) 永田のブラジル移民事業については、丸山浩明の先行研究がある。丸山浩明『ブラジル日本移民の軌跡』、同著『ブラジル日本移民—百年の軌跡—』明石書房、二〇一〇年、一三七—一三九頁。大河、前掲『日本移民論』、二二四—二二六頁。なお永田稠『海外発展と我国の教育』同文館、一九一七年、一〇一—一〇三頁。

- (56) 大河、前掲『日本移民論』、二二六—二二七頁。
- (57) 竹越与三郎「功名禅」、同著『三叉演説集』二西堂、一九〇八年、二二—二三頁。
- (58) 横山源之助「南米渡航案内」『全集』八卷、五六三頁。
- (59) 横山源之助「世人が生駒船の渡航によりて目下注意しつつある南米貿易の現状」『全集』八卷、三五四—三五五頁。
- (60) 横山、前掲『大阪朝日新聞「ブラジル殖民事情調査報告」』、三一一頁。
- (61) 横山、前掲「大隈老伯に寄せて伯国移殖民の現状を報ずる書」、二〇二頁。
- (62) 前山隆は一九三〇年代前後、ブラジルにおける日本人会をはじめとする各種類の日本人団体が総領事館によつて統合され、「象徴的・組織的に日本」と結びついた日本人植民地を「日本帝国の精神的飛地」とみなした。前山隆『エスニシティとブラジル日系人—文化人類学的研究—』御茶の水書房、一九九六年、二二七頁。こうした前山の指摘を踏まえて考えると、横山の「日本人会」・「総領事館」に関する所説が興味深い。

